

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

神崎町立神崎小学校

研究主題

自分の考えをもち、主体的に伝え合う児童の育成
～言語能力の向上に焦点を当てて（R5）～
～説明的文章の読み取りに焦点を当てて（R6）～

1 学校の概要

本校は昨年度創立150周年を迎え、香取郡市の中でも伝統ある小学校である。自然豊かな環境で、町全体として「発酵」をテーマに町おこしをしていることもあり、町行政・地域の積極的な協力を得ながら、生活科や総合的な学習の時間などを中心に、地域の特色を生かした学習カリキュラムに取り組んでいる。

学校の教育目標を「自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童の育成」とし、「勤勉・親切・正直・勇気」の4つの徳を校訓としている。

2 研究の概要

（1）児童の実態と課題

令和5年度の全国学力・学習状況調査の国語において、課題として見られたのは、「知識及び技能」では情報の扱い方に関する事項、「思考力、判断力、表現力等」では書くこと、読むことの項目で、全国、千葉県の上回る正答率を下回った。その中でも、記述式の正答率が特に低かった。要因としては、①条件を正しく理解できなかったこと、②与えられた条件を全て満たす記述ができなかったことが考えられる。つまり、文章の内容を読み取ることはできているが、条件に沿って書くということに慣れていないことが大きな要因だと考えられる。また、情報の扱いに関する事項については、文章や図表などと結び付けながら情報を読み取ることに課題がある。特に、文章とそれに関連した絵がある問いでは、文章をもとにしながら絵と結び付けて読むのではなく、絵からの情報だけを頼りに答えを選んだと思われる児童が半数程度見られる。このことから、文章の内容を正しく理解し、それと関連した資料を選択する力を身に付けられるような指導が必要である。

児童質問紙調査では、児童の生活習慣や学習習慣、自己有用感、基本意識の項目で、全国平均値よりも高い結果となった。しかし、教科に関する項目については、学習の必要性を感じてはいるが、学習に対する興味関心はあまり高まってはいない。

令和5年度の結果を受け、読むことと、特に書くことにおける取組に重点を置いてきた結果、令和6年度の全国学力・学習状況調査の国語において、書くことの項目では、全国、千葉県を上回る正答率となった。課題とされていた記述式の問いについても、書くことにおける「目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」を趣旨とした記述式の問いでは、全国、千葉県を上回る正答率となった。一方、読むことについては、前年度の正答率より微増したものの、全国、千葉県の正答率を下回る結果となっている。読んだことをもとに自分の考えをまとめる記述式においても課題が見られる。前年同様、情報の扱い方に関する事項については、文章や図表などと結び付けながら情報を読み取ることに課題がある。

学習状況調査では、児童の学習習慣と、国語の興味関心において課題が見られる結果となった。
児童の興味関心を引き出し、児童主体となる授業づくりについて再検討していく必要がある。

(2) 学力向上のための取組

<令和5年度の取組>

○ 全国学力・学習状況調査の結果分析の共有と課題解決に向けた手立ての検討

令和5年度の調査問題と結果を職員全体で共有し、課題解決に向けた手立てを話し合った。

そこで出された以下の手立てを意識し、授業づくりに取り組んだ。

【読むこと】

- ・資料から情報を読み取ることができるように、社会科の学習でも資料から分かることを考えさせたり、複数の資料を比較させたりしていく。
- ・文章の大事な部分を落とさず読むことができるように、文の構成を指導し、大事な部分に線を引いたり、丸で囲んだりしていく。
- ・文章の大意を捉えることができるように、要約する活動を取り入れる。

【書くこと】

- ・書き方の型を提示し、慣らしていくことで、書くことへの抵抗感を減らしていく。
- ・キーワードを提示し、それを書く活動を行うことで、条件を満たして書くことができるようにする。
- ・教師の採点基準を明確にし、部分点を設けない採点をすることで、条件の漏れ落ちなく書くことができるようにしていく。

【土台となる言語能力の育成】

- ・語彙を増やすため、『言葉ブック』を作成し、活用する。
- ・自分の考えをもち、表現する場と手立てを講じる。

○ 教師の指導力アップのための相互授業参観

年間2回、相互授業参観週間を設け、上記の手立てやその他の指導についてお互いに学び合うことで、悩みや指導法、資料の共有につながった。

○ 自分の考えをもち、主体的に伝え合うための手立て

書く力を身に付けるためには、「①自分の考えをもつこと」、「②話すことを通して、自分の考えを表現する力を身に付けること」が前提にあると考えた。そこで、2・4・6年生では、①②の両方を身に付けるために、自分の考えをもつ時間を確保し、それをもとにグループで話し合うことで、自分の考えを分かりやすく相手に伝えたり、より考えを深めたりすることができた。3年生では、文章にサイドラインを引きながら読むことで要点をつかむことができるようにし、線を引いた部分をもとにしながら自分の言葉で要約できるようにスモールステップを踏みながら指導を行った。1・5年生では、②の力を身に付けるために、タブレット端末を活用し、自分が話しているところを録画し、振り返ることができるようにした。また、録画したものを全体で共有できるようにしたことで、友達のよい話し方やよい言い回しを真似しようとする姿が見られた。

○ 自分の言葉でまとめや振り返りを書く

国語科以外の教科においても、自分の言葉でまとめや振り返りを書くようにした。振り返りの

視点を与えることで、何を書いたらよいか分からないという児童が減った。また、文章を書く前に友達と話し合う活動を取り入れることで、自分の考えがまとまり言語化しやすくなった。高学年では、必ず入れる言葉（キーワード）を提示したことで、学習問題と整合性がとれたまとめが書けるようになった。

○ 「言葉ブック」の活用

読む力、書く力を高めるためには、語彙を増やす必要がある。そのため、6年間で身に付けたい「事物を表す言葉」「人柄を表す言葉」「心情を表す言葉」を掲載した用語集を作成し、一人一冊配付した。1年生では、気持ちを表す言葉が思い浮かばないときに使用したことで、思考の助けとなった。2年生では、物語文の学習で登場人物の人柄を考える活動で使用し、内容に適した言葉を見つけることができた。3・4・6年生では、作文や授業の振り返りなどを書く際に、言葉ブックの用語を使って書く姿が見られた。また、言葉の意味が分からないものについては、辞書を使って調べるようにしたことで、普段から積極的に使おうという意識が高まった。5年生では、ディベートの学習を通して学んだ言葉や話し方のポイントを新たに追加し、いつでも振り返ることができるようにした。

<令和6年度の取組>

令和5年度、令和6年度の全国学力・学習状況調査の結果を受け、「児童の主体的な学び」と「説明的文章や資料を読み取る力」「目的や条件に応じて書く力」に焦点を当て、以下のような取組を行った。

○ 単元のめあての設定と振り返り（※関連:実践モデルプログラム『見いだす』『まとめあげる』）

児童の主体的な学びにつなげるため、また、指導内容の精選を図るため、説明的文章における各学年の単元のめあての設定を行った。そのために、職員研修で、学習指導要領の読み合わせを行い、「説明的文章の読み方の統一」と「つけたたい力の明確化」を図った。その上で、児童に伝える「単元のめあて」を決めた。（写真1）

そして、単元のめあてに対し、児童自身が意識して取り組み、振り返ることができるようにするために、単元を通して振り返りが書けるワークシートを作成し、活用した。（写真2）

説明的文章の単元の見通し		
(5) 年		
教材名	単元でつけたたい力 ※思考・判断・表現の「読むこと」の内容	単元のめあて（単元を通した学習問題） ※児童に伝えるめあて
（例） 「うめぼしのはたらき」 「めだか」	① 段落相互の關係に着目しながら、考えとそれを変える理由や事例との關係などについて、叙述を基に捉える力。 ② 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する力。	（例） 「中心となる言葉や文に気をつけながら読む」 「中心となるところを見つけてながら読み、短文にまとめよう」 など
「新聞を読む」	ア 事実と感想、意見などとの關係を叙述を基におさえ、文章全体の構成をとらえて、要旨を把握する力。 ウ 目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして、必要な情報を見つけたら、論の進め方について考えたりする力。	「書き方のよさを見つけてながら、新聞を読む」
「ことなる見方」 「言葉と事実」	ア 事実と感想、意見などとの關係を叙述を基におさえ、文章全体の構成をとらえて、要旨を把握する力。 ウ 目的に応じて文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけたら、論の進め方について考えたりする力。	「事例と解説をもとに筆者の考えを読みとこう」

写真1 「単元でつけたたい力」と「単元のめあて」

『アイスは暑いほどおいしい?』『雪は新しいエネルギー』振り返り
名前 ()

【学習の始め】

写真や図などがある方がわかりやすいところもあつけど文章が長いのもあったからこれから理解していきたいです。

時間	内 容	◎・○・△	感 想
1	文章とグラフの読み取り	◎	文章とグラフを結びつけて読み取る意味がわかって読めやすくなった。
2	説明文の読み取り	◎	説明文がわかるようになったので、新聞の読み取りが楽になった。
3	文章の構成	◎	（理由）具体例・原因の場面や内容がわかるようになったので、全体の構成がわかるようになった。
4	雪・氷のエネルギー	◎	雪のエネルギーも一歩とエネルギーがわかるようになったので、雪のエネルギーがわかるようになった。

写真2 単元を通した振り返りシート ⇒

さらに、振り返りの視点を明確にし、授業のねらいに沿って児童に提示することで、児童が自分の学びを自覚し、次の学習へつなげることができるようにした。（表1）

振り返りの目的を明確にした視点	振り返りの内容を焦点化した視点
①これまでの学びを自覚する （例）・分かったことは何かな？ ・大事なことは何かな？ ・どの考えも結局どう見ているということかな？ など ②これからの学びを見通す ・新しくやってみたいことは何かな？ ③次の学びを生み出す ・まだ分からないことはあるかな？	④学習の過程を振り返る ・どんなことを使って考えたかな？ ・どうしてできたのかな？ ・コツは何かな？ ⑤認知の過程を振り返る ・どんなところに注目するのがよかったかな？ ⑥他者の振り返りの内容を自分の学びに生かす ・友達の振り返りの中で似た考えはないかな？
◎単元のめあてから振り返る ・単元のめあてがどう達成されたかな？	
表1 振り返りの視点	

以上の取組により、次のような児童の変容が見られた。

- ・全 体：児童の書ける量が増え、書くことに対する抵抗感が減った。
- ・低学年：学習問題に対する振り返りを書く他に、「どうやったら分かったか」「どんなことができるようになったか」を書く児童も見られるようになってきた。
- ・中学年：分かったことだけでなく、感じたことや疑問に思ったことなどを踏まえてまとめる力がついた。
- ・高学年：単元の初めと終わりで、自分にどのような力がついたか、何によって理解が深まったのかなど、自分の変容や学びの過程を捉えている姿が少しずつ見られるようになってきた。

○ 主体的に伝え合う手立ての工夫（※関連：実践モデルプログラム『広げ深める』）

昨年度に引き続き、児童が主体的に考えたことを伝え合うことができるようにするために、児童が「話したい」「聞きたい」という思いがもてるような手立ての工夫について考え、取り組んだ。

1年生『のりもののカード』でしらせようの学習では、乗り物の「つくり」を考える場面で、避難訓練で実際の救急車を見学しておく、「つくり」に注目できるよう、車体の写真を見せた後、車内の写真へ替えるといった視覚的な情報、また、単元と平行して児童が乗り物に興味をもてるように、多くの関連書籍を教室に置いておくといった手立てを講じたことにより、普段なかなか考えをもてない児童が、より多くの「つくり」を見付け、自分の見付けたものを主体的に伝え合う姿につながった。

2年生「すみれとあり」の説明文を読み取る学習では、読み取ったありの行動を動作化して友達に伝えるという手立てを



写真3 動作化による伝え合い

講じたことで、言葉で説明することに対して苦手意識のある児童も、動作化でイメージがもちやすくなり、自分から友達に伝えることができた。(写真3)

また、1年生と3年生では、伝え合う際に、話合いの視点や、聞き手の視点を設けることで主体的な学びの姿につながることができた。1年生の『のりものカード』でしらせよう」の学習では、見付けた乗り物の「つくり」が「何のために使われるのか」をキーワードに、教師が全体に発問を投げかけたり、グループで伝え合いを行ったりし、「やくわり」に沿った「つくり」を選ぶことができた。

(写真4) 3年生「わたしたちの絵文字」では、グループで話合いを行う際に、聞く時の視点とそれを踏まえた意見の例を言葉ブックに綴じて活用したことで、友達の意見を聞いて自分の考えを広げたり、友達の意見を踏まえた発言をしたりする姿が見られるようになった。(写真5)



写真5 「聞く視点」をまとめたもの(言葉ブックへ)

写真4 キーワードを基に伝え合い

- 文章(資料)を読み取る力をつけるための手立て(※関連：実践モデルプログラム『自分で取り組む』)

説明的文章を読み取る力をつけるために、まずは読み方を教えるということを、全学年で取り組んだ。

6年生「雪は新しいエネルギー」の学習では、資料の分析の仕方(①グラフの読み方、②情報を比較しながらグラフ全体の傾向を捉えること)と、文章と資料を合わせて読むポイントを、「アイスは暑いほどおいしい?」の文章で指導をし、その上で、グラフと文章を合わせて読み、「筆者の説明の工夫」について考え、グループで話し合うという学習活動を行った。

(写真6) 読み方を指導した上で、文章の中での資料の効果について考えさせることで、児童が自分なりに読み取り、考えをもち、伝え合うことができた。

写真6 資料の読み方の指導とグループでの話合い



他の学年でも、読み取り方の指導を行い、継続的に取り組むことで、児童の変容につながっている。以下が手立てと児童の姿である。

- ・低学年：①「なにが」「どうした」に注目し、色分けして囲みながら読み取る、②内容ごとに、赤、青、黒など色分けしてサイドラインを引き、同じように色分けしたワークシートにまとめる、③「はじめに」「つぎに」など順番を表す言葉を使ってまとめる、といった手立てをパターン化し、同じ手順で学習を進めることで、見通しをもち、自信をもって学習を進められる姿が見られたり、色分けしたことで、内容をつかみ、読み取ることができた児童が多く見られたりした。

- ・中・高学年：①要点の見つけ方を時間をかけて指導し、練習する、②その上で、要点を見付けてサイドラインを引き、短く表にまとめる、③高学年では、より定着を図るため、新聞記事の要約を宿題に出す、といった手立てを継続することで、児童が読み取り方を自然と活用して内容を正しく読み取ったり、要点をまとめ、要約したりする力が伸びてきている。

国語科だけでなく、教科等横断的に取り組むことで、スパイラル的に力を伸ばすことをめざし、年間指導計画を各学年で見直し、「伝え合い」と「資料の読み取り」の2つの視点で意識して指導に取り組めるようにした。教師が、教科相互の関連を図りながら、指導にあたる意識につなげることができた。

また、朝の学習タイムに全学年で「文章読解5分間ドリル」に取り組み、読解力の向上を目指した。1～3年生は、取り組むうちに短時間で読めるようになり、問題文の前後に注意して読み取ったり、設問の意図を理解し、答え方に注意を払ったりできる児童の姿につなげることができた。高学年では、内容が簡単であったため、読む力が十分でない児童の力を伸ばすことには有効だったものの、読む力がある児童には内容を高度にしたり、裏面に要約したりするなど、内容の工夫が必要であった。

(3) 学習サポーターの活用

学習理解が難しい児童やつまずきが見られた児童への支援のために活用した。特に、読解問題や辞書の使い方、作文などの個別に指導が必要な場合は、担任だけで指導するときよりも学習サポーターが入ったことで、より多くの児童が学習のめあてを達成することができた。

3 研究の成果

- ・「単元のめあて」と「振り返り」を、教師と児童が意識することで、指導の内容が精選されるとともに、児童自身が自分の学びの過程を捉えることにつながった。
- ・授業のまとめや振り返りを継続することで、書く力、まとめる力の向上が見られた。
- ・つきたい力に沿って、説明文や資料の読み方を丁寧に指導し、指導した読み方を継続することで、読み取り技能の向上が見られた。
- ・伝え合いの視点や聞く側の視点を与えることで、ねらいに沿った伝え合いができ、話合いに深まりが見られた。

4 今後の課題

- ・限られた授業時間の中で、しっかりと振り返りの時間を確保するにはどうしたらよいか。
- ・伝え合いの視点を絞るための発問はどうあったらよいか。
- ・話合いによって、考えをより深めていくために、「聞き手」を育てる指導はどうあったらよいか。
- ・「伝え合い」が十分に行えていない児童や、書くことにとても時間がかかり、配慮を要する児童への手立てはどうあったらよいか。
- ・継続することで効果はあるものの、実態に応じて、ドリルの内容を精選する必要がある。